
砂漠の帝国軍人

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂漠の帝国軍人

【Nコード】

N0069W

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

混迷極める北アフリカ戦線。連合国側の一翼を担うフェアリーランド王国軍に、1人の帝国陸軍少佐が収容がされたことで、物語がはじまる。

漫画「砂漠のウサギ」二次創作。

1 目 次

北アフリカ戦線。そこは現在に至るまで多くの人々の興味を惹く場所だ。何故ならかの地においては、かつて枢軸国と連合国による熾烈な戦闘が繰り広げられたからだ。

規模だけを考えるならば、ロシアや西欧で繰り広げられた戦いには及ばない。しかしながらロンメルやモントゴメリー、ベルタと言った名だたる指揮官たちに率いられた各軍が繰り広げた戦いとそのドラマの内容は、勝らずとも劣らないだけの魅力を持っていた。

特に北アフリカ戦線において寡兵ながらよく活躍したフェアリーランド王国軍の戦いは、同軍の主力を少女たちが占めていた分も含めて、今なお人気が高い。

一方で、そんな北アフリカ戦線は大戦中も各国の興味を引く戦線であった。そのため多数の観戦武官が枢軸・連合軍に従軍していた。

この物語は、そんな観戦武官の一人が体験した物語。

1942年2月 北アフリカ戦線

「やっと終わったわね」

戦車のキューポラから頭を出したメイア少尉は、未だに硝煙のキツイ臭いが鼻につく戦場を見渡しながら言った。そこには十数台の戦車が煙を噴き上げていた。いずれもロマーニヤ陸軍の主力である

M13やP26戦車であった。

「中隊長より全車へ。イタ公どもは遁走したわ。これより生存者の搜索にかかるわよ」

無線越しに中隊長であるコノリー大尉の声が響いた。

「了解。ロイス、前進して。イタ公の生存者がいないか探すわよ」

「OK」

操縦手のロイス伍長は戦車を前へと進めた。だがそこに広がっていたのは……

「うわー。これで生存者なんかいるのかしらね？」

あたり一面撃破されたM13戦車やその他の車両の残骸が燃え上がり、そして至近弾による弾痕で地面は穴ぼこだらけであった。見た限り生存者がいる気配は無い。

「とにかく、探すだけ探しましょう。見つからなかったらそのまま戻ればいいだけだし」

「そうだね」

メイアの支持の下、55号車の3人は付近に生存者がいないか探し始めた。しかし、案の定生存者が見つかる気配はない。

「こりゃ探すだけ無駄じゃないの？」

探し始めてから5分もしない内に、操縦手のロイスが欠伸をしなから言う。不謹慎ではあるが、メイアにもとても生存者がいるとは思えなかった。

「そうね。戻りましょうか」

とメイアも諦めた時。

「メイア！いたよ！」

装填手のモーリス軍曹の声であった。

「いたって何が？」

「生存者よ生存者」

「へえ、よく見つけたわね。それで、どこにいるの？」

「その撃破された装甲車の横。今フラワーが診てるんだけど、驚かないでよ。どうやらそいつ、イタ公じゃないらしいのよ」

「イタ公じゃないならなんのよ？ドイツ、それともオリュンポス？」

「そうじゃないのよ。どうやら東洋人みたいなんだけど、見たことも無い軍服着ているからよくわからないのよ」

「ふーん。まあいいわ、とにかくそいつのところまで行きましょう」

メイアたち3人は、その謎の人物がいる所まで歩いて行った。

モーリスの言ったとおり、撃破されたイタリア軍の装甲車のそばにフラワーが腰を降ろしていた。どうやら誰かを診ているようだ。

「フラワー！」

「あ、メイヤ」

「そいつが見つけた奴ね？一体どこの人間？それにケガの具合は？」

「ケガは大したこと無い。直に目覚めと思う。ただどこの人間かまではわからない」

「そう。とりあえず、その捕虜を見せてよ」

「うん。この人」

メイアはフラワーが診ていた人物をマジマジと見る。歳は30代前半か20代前半と言ったところだろう。この戦域では見慣れないカーキ色の軍服を着込み、モーリスが言っていたとおり黒髪の東洋人の顔立ちをしていた。

「確かに見慣れない制服ね……けどこの服どこかで見た覚えが……」

メイアは必死になって、記憶の引き出しの中身をひっくり返す。

「確かに東洋人だね。けどドイツ軍のパチモンみたいな制服なんて採用している国あったっけ？」

ロイスがボロクソに言うが、彼女も男の軍服がどこの軍までかは思い出せないらしい。

「フラワーも知らないの？」

ロイスの間に、フラワーは首をブンブン振った。

と、ようやくあーでもないこーでもないとぶつくさ言っていたメ
イアの頭の上に、電球が点灯した。

「あ、思い出した！この服は確か日本軍よ！」

「「「日本軍！？」「」」

「間違いないわ。首都で何度か駐在武官だったかが、この服を着て
いるのを見たわ」

「な、何で日本人がこんなところに！？日本は確かイギリスとアメ
リカとは戦争していたけど、うちの国とは戦争していなかったんじ
ゃ？」

「知らないわよ。とにかく、連れて行って大隊長と中隊長に報告し
ましよう。ロイス、55号車を急いで回してちょうだい」

「了解」

「モーリスは無線機で司令部へ報告して頂戴」

「わかった」

「フラワーは55号車が来るまで、そいつをしっかりと見ていて」

「うん」

「うーん……ハッ!?ここはどこだ!?……て痛!」

男は起き上がるなり、呻きながら頭を押さえた。

「ちょっと大丈夫?外の傷は大したことないみたいだけど、頭を打ったみたいだから安静にしていた方がいいわよ」

「……あんた誰だ!？」

「英語はわかるかしら?イタリア語じゃ聞き取れないんだけど」

「英語?……ああ、大丈夫。話せるよ」

「随分と訛ってるわね」

「しばらく使ってたからね……て、ここはどこだ!?!?と云うかあんたは誰だ!?!」

「ようやくその質問ね。私はメイア・ヴァン・ペルト少尉よ。感謝してよね、あなたをここまで連れてきたのは私達なんだから」

男が周囲を見回すと、テントの中で自分はベッドに横たわっていた。どうやら野戦病院か何からしい。

「その制服……フェアリーランド軍か!?!?と云うことは俺は捕虜に

なつたのか？」

「それについてはこれから上の人たちと話し合うことよ。何せあなたの国と私たちの国は、敵対国だけど敵国じゃないからね」

「まあな。おっと、失礼した。杉下薫帝国陸軍少佐だ」

「え！？少佐！失礼しました！」

メイアが立ち上がると、慌てて敬礼をした。彼女は帝国陸軍の士官だとはわかっていたが、自分よりはるかに上の佐官とは思ってもいなかったのだ。

「ところで、ここはどこだ？」

「こ、ここは我が軍の駐屯地内の野戦病院です。場所については軍機に触れるためお教えできません」

「まあ、普通はそうだろうな」

と、途端にテント内が賑やかになった。

「失礼するわよメイア」

「中隊長！」

メイアは後ろからやってきた女性に立ち上がると敬礼した。

「いいのよ。それよりも、そちらが？」

「はい。日本軍の少佐だそうです」

「そう。初めまして、少佐。ダリア・コノリー大尉です」

「帝国陸軍少佐杉下薰だ。君が最先任か？」

「はい。現在大隊長は用があつて基地を離れており、今は私が最先任です」

「そうか。それで、俺はどうなるのかな？もし捕虜と言つことなら……」

杉下はチラッとベッドの脇に置かれた自分の軍刀を見た。

「その件なんですが。我が軍では基本的に直接交戦中ではない枢軸国の将兵に対しては、枢軸国支配地域へ送り返すことにしています」

「ほう。フェアリーランドがロマーニヤとオリュンポス以外の国と直接参戦せず、衝突を避けていると言つのは本当みたいだな」

「我が国は無用な争いを好みませんから」

「だが送ってもらえるのならありがたい。ぜひともそうさせてもらおう」

「わかりました。ですが少佐はしばらくは安静の必要がありますし、戦線の動きにも注意しなければなりません。ですので、少々時間を下さい」

「わかった」

「理解していただき感謝します。ところで、少佐は何故あそこに？」

「詳しいことは言えないが、観戦武官として大使館から派遣されている。それ以上は言えない」

利敵行為になる可能性のことは、一切言わない。軍人として当然のことであつた。

「それだけで結構です。それから、大使館へ連絡したほうがよろしいでしょうか？」

「お願いする」

「わかりました。さっそく部下に命じておきます」

「感謝するよ大尉」

「では少佐。ゆっくりお休みください。それから、メイア。ちょっといいかしら？」

コノリーは立ち上がるとメイアを連れて、そそくさと野戦病院となっているテントから出て行った。

「イギリス軍に捕まらなくて良かったぜ」

コノリーを見送った杉下は、日本語でそう呟いた。

「ちょっとあんたたち。何やってるの？」

テントから出たところで、コノリーはテントを覗き込んでいた

「す、すいません大尉！」

「男の人が運ばれるなんて珍しいことだから気になって」

「もう。すぐに任務に戻りなさい！気の抜けすぎよ！早く戻らないと減給にするわよ！」

「「ひええ！」「ひ」

コノリーに一括された兵士たちは、一目散に逃げて行った。

「さて、静かになったところで。メイヤ、悪いんだけどあんたの小隊の兵士で、あの少佐を監視しておいてくれない」

「え！？何故ですか？」

「念のためよ。スパイのようなことをやられちゃたまらないわ」

「それはそうですが。何でうちの小隊にお鉢が回ってくるんですか？」

「あなたの小隊があの人を見つけたんだからに決まっているでしょ」

「そんな横暴な！」

「と・に・か・く。頼むわよ。何もあなた1人でやれって言ってる

んじゃないんだから。頼むわよ」

「ええ！？ちよつと中隊長！」

言っただけ言つて、コノリーは言つてしまった。

「行っちゃった……仕方が無いわね」

「と言うわけで、あの少佐をうちの小隊で監視することになりました」

「えー！」

「面倒くさい！」

「嫌デスヨー！」

メイアの言葉に、小隊員たちから一斉にブーイングが出た。

「仕方がないでしょ。命令なんだから。ほんの数日のことだから、我慢してやりなさい」

命令と言うことで、結局皆押し黙った。

「それで、監視ってどうやるの？」

モーリスの質問に、メイアは少しばかり考えて口を開く。

「まあ順番決めて、交代で近くにいるだけでいいでしょ」

「順番は？」

「公平に阿弥陀くじで決めましょうか」

メイアは土の上に阿弥陀を描き、小隊員の監視の順番を決めた。

「と言うわけで、ヘレン・クリストファー伍長デース！よろしく頼みマース！」

「ああ、よろしく」

こうして、杉下少佐が後の回想で「軍人としてもっとも奇妙奇天烈かつ、もっとも楽しかった時間」と書いた3日間が始まった。

1日目 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

1日目 2

ジー……

「……あのさ、伍長」

「何デースか？」

ベッドに横たわるカーキ色の軍服を着た男、杉下薫日本陸軍少佐はすぐそばに椅子を持ち込んでジーと自分を見つめているツインテールの少女に、ジト目で言う。

「そのジーツと見つめるのやめてくれないかな？ 気が散るんだけど」

「でも、私は今アナタを監視中デース」

フェアリーランド陸軍に保護された日本陸軍の杉下。幸いフェアリーランドとは直接の交戦国ではないので捕虜ではない。そして軍という組織である以上、監視を受けるというのも納得できる。

しかしながら、どうみても子供にしか見えない少女にジーツと見つめられるのは、帝国陸軍の基準に照らせば普通ではない事態であった。

もちろん杉下も観戦武官としてロマーニャに派遣されていたのだから、フェアリーランドと言う国について全く無知ではない。

フェアリーランドはどう言うわけか、生まれてくる男女比が3対7なのだ。そのため、女性を社会のあらゆる役職に組み込まなければ

ばやっていけない。

帝国陸海軍においては、軍属以外に女性を採用することはマズ無い。第一まず女性が男性に対して権利を制限されている国なのである。

加えてその他の国でも、まだ大々的に軍隊に女性を採用していない時代である。だから知識としては知っていても、やはり大いに違和感を感じずにはられないのだ。

「もういい。ところで、クリストファー伍長だったな？」

「はい。そうデース。クリスと呼んで下さい」

「それでクリス伍長、君は歩兵なのかい？」

「いいえ。私は戦車兵デース！」

「ほう戦車兵」

「そうデース！カ〇タデリバリーズの一員デース！」

「なるほど。だから君はカワ〇キャラなんだね。まあメタルのほともかく、そうなると操縦手かな？」

「違いマース。照準手デース！走りながら撃つのが得意デース！」

「走りながら……ほう。そうなると、行進間射撃ということか。そりゃスゴイ！」

杉下は感嘆の声を上げた。この時代戦車の照準装置に関する技術は未熟で、人の技術や勘に頼る部分が大きく、停車しての射撃が普通であった。だから行進間射撃が得意と言つのは、スゴイことであつた。

もつとも、それはフェアリーランドの戦車にある秘密も大きかつたが。

「そう言えば、さっきの戦いでやたら走りながら発砲して命中弾を叩き出している奴がいたな。ちらつとしか見えなかつたけど、確か5Xとか描いてある奴だつた」

「それ私が乗つてゐる戦車デース！」

「そうだったのか。俺の乗っていた装甲車は君たちの砲弾にやられたんだよ」

すると、

「そ、それはスイマセーデス！」

「いや、君は軍人としての本分を尽くしたんだから別に悪いことじゃないぞ。むしろ見事に当てたことを賞賛したい。それに君の戦車は一回り小さな砲を使つていたな。そのお陰で爆散せずに済んだし……それにしても良い腕だ。男だつたら是非とも我が軍に欲しいくらいだ」

「ありがとうございマース！」

「ところで、さっきから氣になつたんだが、君の英語は私程ではな

いが鈍っているな」

「それは多分私がアメリカ生まれだからだと思いマース」

その言葉に、杉下の表情が苦々しいものとなる。

「あ、アメリカかね」

「はい。私はアメリカのカリフォルニア出身デース！」

クリスは笑いながら言ったが、杉下としては複雑な気分であった。何故なら日本は今アメリカ相手に戦争しているのだから。

「ふむ。そうになると、フェアリーランドへ移住したと言っことかね？」

「そうデース。パパが貿易商なので」

「そうか。軍に入ったのはやはり徴兵かな？」

「はい。それで、少佐の訛りは何でデースか？」

「私はロマーニヤ駐在が長かったからね。一応ヨーロッパ各国を回ったから、ドイツ語と英語も出来ることは出来るが、一番得意なのはイタリア語かな」

「だからさっきロマーニヤ軍と一緒にいたんですか？」

「それ以上は機密だから言えないな」

「エエ！？自分ばかり話させてズルイデース！」

「ああわかったわかった。任務については話せないが、昔話くらいはしてやるよ」

「ありがとうございマース！」

「俺は岐阜の山奥の農家の三男坊でね、もう父親からもらえる土地がないのは確実だった。だから自分自身で身を立てるしかなかったんだ。かと言って、大学に行かせてもらえる状況にはなかったからな、仕方が無く士官学校へ進んだんだ」

「つまり食つために軍人になったと言うことデースか？」

「はつきり言ってくれるな。だがまあ、はつきり言えばその通りだ。しかしなあ、こう見えても士官学校じゃ恩賜の銀時計を貰ったんだぞ」

「銀時計？何デースかそれは？」

胸を張って言ったのに、聴き返されてしまい杉下は少々がっくりする。

「そうか、外人にはわからないか。恩賜の銀時計は士官学校の成績優秀者に天皇陛下から与えられる贈り物のことだよ」

「おお！王様から授けられるとはスゴイデース！」

「それで卒業して、俺は騎兵科に配属になったんだが、すぐにロマーニアに留学になってな」

「何でロマーニャ？」

「端的に言えば他に行く奴がいなかったからかな。まあ、ロマーニャも悪いところじゃないよ。飯は美味しい、景色もいいし。ただ軍隊についてはね……」

言葉を濁す杉下を見て、クリスも苦笑いするしかなかった。

「それでまあ、ロマーニャに駐在武官としていたわけだね。観戦武官としてついていったらこの有様だよ。たく、君たちの国の方がまだやる気があるぞ」

「あたりまえデース！イタ公なんかには負けマセーン！」

「その意気やよし。ロマーニャ人もドイツ人くらいに働いてくれれば良いんだけどね」

杉下が溜息を吐くと、彼らの元にお盆を持ったメイアがやってきた。

「少佐殿。食事をお持ちしました。そしてクリス、交代よ。ここからは私が引き継ぐわ」

「わかりました。それじゃあ少佐」

「ああ。楽しい会話ありがとう」

すると、メイアがクリスをジロツと見る。

「クリス。あんた余計なこと喋ってないでしょうね」

「じゃ、喋ってマセーンよメイア少尉！」

「その通りだよ少尉。彼女とは他愛もないことを話したただけだ」

「そう。ならいいけど」

「じゃ、じゃあ私は失礼しマース」

そう言つと、クリスはさっさと行ってしまった。

「たく。どうぞ少佐。お食事です」

「ありがとう少尉。パンに缶詰にスープか。まあ、戦場でこれだけ出せれば上等だろう」

「言っておきますが、量は保証しますが味は保証しかねます」

「うん？どれどれ？」

とスープに口をつけた杉下の顔は、微妙なものになる。

「まあマズイとまではいかんが、確かにイタリア料理と比べちゃいかんだろうな」

途端にメイアの表情が変わる。

「あら？嫌な顔しないんですね？我が軍の食事は兵士からとても不評なんですよ。特にその乾燥ジャガイモと乾燥ほうれん草のスープ

は」

「そうかい？そりゃイタリア軍やドイツ軍の食事よりかは落ちるが、別に食えない程じゃないだろ。むしろ、これだけの食事を最前線で食べさせてもらえるだけでもありがたいと思わんとね」

この言葉にメイアは飛び上がらんばかりに驚く。何せフェアリーランド軍の食事は自軍兵士からさえ「マズイ」と評価されるような代物だった。

それを杉下は独伊のものより味は落ちるが、マズイとまでは行かないと評した。

「ちょちよつと少佐殿。あなた味覚大丈夫ですか？」

「そう言われても、俺日本人だしね。味覚が違うのは仕方が無いと思うよ」

正論を言われ、メイアとしては反論し難くなる。

「そりゃそうかもしれないけど」

「やつぱり兵站とかじゃこっちの方が進んでいるんだな。戦場で兵士が腹一杯食えるんだからな」

杉下はメイアに聞こえないようにボソツと言った。

日本陸軍が決して兵站を無視したと言うわけではないが、食料などを現地調達すると言うことが珍しくない。そのため、兵士が十分な食料や弾薬なしで戦わなければならぬことも珍しくなかった。

「何か言いました？」

メイアは目ざとく聞き取っていたが、もちろん自分の恥を公言するようなバカでは、杉下はなかった。

「いいや。ところで、メイア少尉。君はクリス伍長の上司なのかな？」

「はい。私の小隊に彼女が配置されています」

「そうか。いい部下を持ったようで君は幸せだねメイア少尉」

「光栄であります」

「それと迷惑掛けてすまないね」

「いえ、これも任務ですから。ところで少佐、どうしてイタリア軍についていたんですか？つくならドイツ軍の方が良かったんじゃないですか？」

「まあ、その辺りは色々と言えない理由があるんだよ」

杉下は自分の任務に関する一切言おうとしなかった。

「ところで、メイア少尉の乗車はもしかして55号車かな？」

「あ、はい。そうですね。それが何か？」

「いや、なんでもない」

その後は特に意味のない会話をただで、夕食の時間は終わった。

1 日目 2 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております

1日目 3

砂漠にも夜はやってくる。第三オアシスも夜の闇に包まれ、歩哨以外の兵士たちは次の戦いに備えて休息をとる。

夜戦病院内のベッドに体を横たえていた日本陸軍の杉下少佐は、腕時計を眺めると、おもむろにベッドから立ち上がった。そして他の患者を起こさないように、静かにテントの外へと向かった。

「寒！」

テントから出ると、彼は身を一瞬振るわせた。砂漠の夜は昼間では考えられないほど気温が下がる。

「全く、この寒さはなんとかならないものかね」

そう呟くと、彼はゆっくりと辺りを窺いながら歩き始めた。

「夜だからって歩哨も立てていないとは、無用心な……て、ウン？」

テントから出たばかりの所に、コートを着込んで小銃を持ったまま座り込んで眠っている少女がいた。昼間に話をしたクリスと同じ位の少女兵士だ。

「やれやれ。ロマーニヤの砂漠コマンドが来たら対処できんぞ」

と呆れながらも、杉下は彼女を起こすようなこともなく、その横を通り過ぎようとした。

しかし、少女の体が不自然な形になっているのに気づくと、起さないうちにそつと直してやる。幸い少女兵はよっぽど疲れているのか、起きることなくだらしなく「ママ……」と寝言を呟いていた。

そんな彼女を微笑みながら一瞥すると、彼はその場を離れる。そして周囲を注意深く探りながら、基地内を歩いていく。

「テントばかりの本当に急造の陣地って感じだな。幾つか簡易兵舎みたいなものもあるが……このあたりはフェ軍もドイツやロマーニヤと同じ水準のようだな」

と、そこで彼は立ち止まり身を屈める。

少し離れた所を、歩哨らしい兵士が歩いていった。が、その姿にまたも杉下は呆れてしまった。

「欠伸しながらか。眠いのはわかるが、どうも緊張感に欠けているんじゃないのか？」

彼は知らなかったが、実はこの時期この方面のフェアリーランド軍司令官であるベルタ中將が作戦計画の調整のために後方に引き下がっており、彼女が行っていた夜間の見回りがなくなっていた。このため、夜間に兵士の緊張を保つ要素に欠損が生じていたのだった。

「まあ、内向きの警戒ならあれでいいのかな？」

杉下は歩哨に見つからず、さらにテント内で眠っている或いはまだ起きている兵士に感づかれないよう、静かに基地内を見て回った。

もちろんこれはスパイ行為である。日本とフェアリーランド王国

が直接対戦している国ではないとはいえ、極刑の可能性のある危険な行為であった。

しかしながら彼の軍人としての血、とりわけ情報将校としての血が危険な任務へと突き動かしていた。

陣地内にある建物の構成や、置かれている車両の様子を探っていく。

「特段注意すべき点はないな。外周の防御陣地も見てみたいが、さすがにそこまで行くのは危険だ。そろそろ戻るか」

そう考えた時。

ガチャ。

突如背中金属を当てられた感触がした。

「!？」

「動かないで！動けばすぐに撃つ。静かに手を上げて立ち上がって」

女性の声だ。大声ではない。彼だけに聞こえるくらいの小さな声だ。だが、その声には明らかに強い意思が含まれている。

杉下は言われた通りに両手を上げてゆっくりと立ち上がった。

「歩いて」

「わかった」

銃口を背中に突きつけられたまま、杉下は言われた通りに歩いた。

「そのまま基地の外に向かって歩いて」

その言葉に、杉下は違和感を覚えた。自分のことを通報するならば基地の中へ歩かせるか、それともこの場で振り向かせるのが普通だろう。それなのに、基地の外へ向かい歩けと言うのはどうにも解せない話であった。

しかし他に選択肢はないので、彼は言われたとおりにした。

銃を突きつけられ、両手を上げたまま彼は基地の外へと出た。周囲に人影はなく、荒涼とした砂漠が広がるだけだ。

（前線とは恐らく逆側だな）

こんな状況でも、現状把握をする。それが彼の仕事であった。

「ここがいい。こっちを向いて」

言われたとおり、彼は振り返った。そして彼は驚いた。目の前にいたのは少女兵であった。しかしながら顔の左右をガーゼで覆っていた。

「君は昼間見たぞ。確かメイア少尉の部下でフラワーとか言っていたな？」

「そんなことはどうでもいい。それより、あなたはあそこで何をしていたの？」

「何をしていたと思う？」

「情報収集」

「御名答。それで、どうする？私をスパイとして告発するかね？」

杉下の問に、フラワーは答えず返す。

「どうしてそんなことをしたの？ローマーニャに情報を流すため？」

「そんなつもりはない……と言っても君は信じないだろうね」

フラワーはその言葉に肯定も否定もしなかった。

（まあ、無言が肯定だろうけどな）

「あなたの任務は何？」

「私の任務はローマーニャ軍部隊における観戦だ。それ以上でもそれ以下でもない。信じてはもらえんだろうが、基地内を見ていたのは私の独断……と言うより好奇心かな」

杉下は笑うが、フラワーは表情体勢ともに崩さない。

「好奇心？」

「君たちの軍隊、すなわちフェアリーランド軍は我が軍からすれば未知な部分が多い。気にならない方がおかしい。特に、私が行動を共にしていたローマーニャ軍部隊をあっさりと撃破した後ならね」

「その結果が死であつても？」

「もちろん。言っておくが、これは私の独断であり別に君たちに対して利敵行為を行おうとしているわけじゃない」

「……」

フラワーは杉下はジツと見つめていた。

「半分本当で半分嘘」

「え！？」

「あなたが今言った内容。半分嘘で半分本当。嘘はあなたの独断と言うこと。本当なのは私たちに対して利敵行為を働かないこと」

「な！？」

杉下は思わず声を上げた。彼女の言うとおりだったからだ。確かに杉下は彼女達に対して利敵行為を働くつもりはなかった。確かに日本はロマーニヤと同盟を結んでいるが、一方でフェアリーランドとは未だに中立であるし、今後もその中立を維持する方針であつた。

しかしながら、杉下に対しては観戦と共に出来うる限りのフェ軍に関する情報収集が命じられていた。これは日本にとって、フェアリーランド王国は馴染みのない国であり、その実態がわからない部分も多いからだ。特に大戦突入後のフェ軍に関しては。

ただし、基地内の様子を探ったのはその命令もあるが、彼自身の

好奇心であると言つのも間違いないことであつた。

もつとも、杉下には目の前のフラワーがまるで心の中を読んだような発言をした方が氣になつた。

「どうしてそう思ふんだ？」

それに対して、フラワーは銃口の先をおろして言う。

「そんな風に思えたから。それに、テントの前で寝ていた兵士の姿勢を直してあげたでしょ？」

フラワーのセリフを聞き、杉下はまたも驚いた。

「見ていたのか！？」

フラワーは小さく頷くと微笑む。

「あなたが出てきたのを、風が語りかけて教えてくれたから」

「不思議な娘だ」

「あなたが抜け出して調べていたのは黙っている。ただし、あなたも絶対にロマーニヤに味方するような行為は謹んで欲しい」

「ああ、約束する。それにしても、風が語りかけるか……エーベルト大尉がそんなことを言っていたな」

杉下の何気ない一言に、今度はフラワーが強く反応した。

「ハンス!？」

「知っているのか？ハンス・エーベルト大尉を？」

「いや、それは……」

「そうか、彼が言っていたフェアリーランドの戦友と言うのは君のことか？」

「……」

「無言が肯定か」

「……どうして彼のことを知っているの？」

「私は観戦武官だよ。一応ロマーニヤ軍の部隊と行動していたけど、情報収集も欠かさずに行っていた。その中には当然ながらDAKもいた。そして彼、エーベルト大尉と話す機会もあったわけだ」

「彼は元気だった？」

「ああ。今やドイツ軍戦車部隊のエースの1人だよ。中々の好青年だったよ。彼とは色々と話したが、その中で彼が以前フェアリーランドの南フリカ自治領に行っていたことと、その時会った不思議な戦友の話もしてくれた」

「そう……」

「確約は出来ないが、もし彼に伝えることがあつたら言ってくれてもいいよ」

だがフラワーは少々考えると、ハッキリと返した。

「……その必要はない」

「いいのか？」

「うん。構わない」

理由を聞こうかとも考えた。しかし、杉下はそれ以上聞く気がしなかった。

「……わかった」

「それじゃあ、戻りましょう。あなたのことは言わないけど、これ以上基地のことを見せるわけにもいかない」

「当然だろうな。朝まで大人しく寝ることにするよ。それから、私
が戻ってからにして欲しいが、歩哨たちに注意を促したほうがいい
ぞ」

「わかつている」

杉下の忠告は、フラワーにとって言うまでもないことであつたよ
うだ。

2人は野戦病院のテントへと戻り始める。

その時、一陣の風が舞、フラワーのミニスカートをめくつた。

「え!？」

闇の中、一瞬のことであつたが、杉下は何か普通だつたらありえない物を見てしまったような気がした。

(な、そんなバカな!？いや、暗い中だつたから見間違ひだつたかも……俺って、そんなに欲求不満なのか!？)

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「だつたら早く行く」

「わかつてる」

この後杉下は無事にテントまで戻ることができた。しかしながら、先ほど見たフラワーのスカートの中の光景が頭の中でグルグルと回り、悶々とした夜を過ごすこととなる。

1 日目 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

2日目 1

ドーン！グワーン！

「砲撃の音……演習かな？」

ベッドに横たわる杉下少佐は、テントの外から聞こえてきた砲撃音を聞くと、読んでいた新聞を折りたたみ、そちらに注意を向ける。

砲撃の音は断続的に聞こえてくる。

「随分撃つな。そんなに砲弾が潤沢なのかな？」

「気になりますか、少佐殿？」

「あ、これはコノリー大尉。ええ、何しろ軍人だからね」

やって来たのはウサ耳が特徴のフェアリーランド軍士官、ダリア・コノリー大尉であった。

「あなたの仰るとおり、今我が軍の戦車部隊がちょうど演習中なのです。お休みの所お騒がせして申し訳ありません」

「いや、こちらはお客の身分だから気にしないよ」

「そうですか……気になるなら見て行きますか？」

「見ていくって演習を？」

「そうです」

「いいのかい？中立国とは言え、他国の軍人に手の内を晒すような真似をして」

「ええ、見るだけなら構いませんよ」

その言葉に、杉下は少々考えたが、結局受け入れることにした。

「ならせつかくだ、フェアリーランド軍の実力を改めて見させてもらおうか」

「ではこちらへどうぞ、少佐」

「ほう」

案内された先では、フェアリーランド軍の主力戦車である「ハイドライド」Mk？とMK？が射撃演習を行っていた。

2台の戦車が、走りながら砂漠に立てられた目標目掛けて射撃を繰り返し返している。

そこで杉下が感心したのは、フェ軍の戦車が行進間射撃を行なっていることであつた。まだ射撃管制装置などの技術が未熟なこの時代、戦車の射撃は停止して行なうと言うのが常識であつた。

もちろん、行進間射撃もやれば出来なくはないが、それを行えるのは優れた勘と射撃技術を有する極一握りのベテランに限られてい

た。それ以外の人間がやつても、明後日の場所に着弾するのがオチだ。

しかし、杉下が見る限りでは2両の戦車のキューポラから頭を出しているのは昨日会ったメイアと言う少尉と彼女より少し若いと思われる少女だ。実戦を経験しているにしても、さすがに命中しすぎである。

「いやはや、昨日私が見た戦闘でもオタクの軍の射撃は優秀だと感じたが、ここまでとは」

「お褒めに預かり恐縮です」

と、ここで杉下は少しばかり揺さぶりを掛けてみることにした。

「それにしても行進間射撃とはやりますな。我が国の戦車兵でも、あそこまでの技量を有している者は中々ありますまい。オタクの戦車兵はよい腕を持っていらっしやる」

「日頃の訓練の賜物です」

「本当にそれだけですかな？」

暗に「何か特殊な装備や兵器を使っているんじゃないのか？」と問うてみる。もちろんコノリーが正直に何か言う可能性等ないが、少しでも動揺を見せたり、何か引つかかるようなセリフを口にすれば、少なくとも何かトリックが隠されているのはわかる。

しかし、コノリーは出来る士官であった。

「もちろん、それだけです」

顔色一つ変えず、さらりとそう言っただけだ。

「ほう。それはそれは。私はてっきり何か面白いタネがあるのかと思いましたよ」

「買い被りです」

「申し訳ない。つつい細かいことまで考えてしまって、私の悪い癖です」

「いえ、全然気にしていませんよ」

（むう、出来るなこの大尉）

杉下は内心でコノリーに感心していた。

ただし、実を言うとコノリーの内心は彼が思っているほど穏やかではなかった。

（危ない危ない。ただでさえ上官だっけ言うのに、男性で中立国の人だもん。心臓に悪いっただけありやしないわ）

彼女も彼女なりに精一杯やっていたのだ。

と2人がやり取りをやっていた所へ、兵士が1人走ってきた。

「コノリー大尉！」

「何かしら？」

「ジャンヌ少佐が大尉をお呼びです」

「わかったわ」

「それから、そちらの少佐にも来ていただきいそうです」

「おや？私もかい？」

杉下はごく普通に問い返した。

「ええ。何でもお見舞いの言葉をかけたいとか」

「それはありがたいことだが、ジャンヌ少佐で……もしかして、バツカニアンスのジャンヌ少佐かな？」

「知っているんですか？」

「まあ、観戦武官として独伊両軍の話や各国の新聞に目を通していたからね。名前くらいは知っているよ。なんでも、そうとう勇猛な部隊だと聞いているが」

「ええ、まあ。とにかく、行きましょう。案内してちょうだい」

「わかりました大尉！」

その兵士は嬉しそうに敬礼した。その笑顔がコノリーに向けられているのを、杉下は見逃さなかった。

（中々人気のようだ。指揮官として下に付く者に好かれているのは悪くない。この大尉はそれだけ人望があるのか、それとも……）

「どうかされましたか？少佐」

「いや、何でもない。ちょっと考え事をね。しかし大尉は羨ましいね。部下に随分と好かれているようじゃないか。部下と上手く付き合うのは良いことだ」

「ええ、ありがとうございます……時々それが屈折しているのが厄介なだけだね」

後半の言葉を、コノリーは小さな声で呟いた。

「何か言ったかな？」

「いいえ、何も。さあ、早く行きましょう」

「？」

「少佐殿！コノリー大尉と日本陸軍の杉下少佐をお連れ致しました！」

「うむ、御苦労」

案内された天幕に、杉下は通された。中には椅子が3脚用意されており、その内1脚に1人の女性が座っていた。

（これはこれは）

その姿を見て、顔には出さなかったが杉下は少しばかり驚いてしまった。

座っていたのはフェアリーランド陸軍の少佐の階級章を付けた女性であった。眼鏡をかけ、スカートを履いている姿とは対照的に、顔を含む体全体が傷だらけ、足と腕のそれぞれ片方ずつが鎧のようなもので覆われ、激しい戦場を渡り歩いてきたことが明白であった。

事実、胸にはフェアリーランド軍制式の戦傷章がぶら下がっていた。

しかし、例えそれを抜きにしても杉下は彼女が歴戦の人間であることは容易にさっすることができると思った。何故なら。

（イイ目をしているな）

その表情と眼光は、長年戦場を渡り歩き、実際に敵と刃を交わしてきた者のみが持つそれであったからだ。

そんな彼女は、杉下が入ると立ち上がり敬礼した。

「フェアリーランド陸軍少佐ジャンヌ・マッハです」

「初めましてジャンヌ少佐。日本陸軍少佐、杉下薫少佐です。よろしく」

2人は敬礼を交わす。

「こちらこそよろしく。この度は大いに御不便をお掛けしているが、何か御所望の物などはないかな？ 砂漠の戦場ゆえ用意できる物は限られるが、必要であれば言って欲しい」

「心遣い感謝します。だが私も軍人。あまり多くを求めるつもりはない。そのお気持ちだけ、受け取っておきましょう。それよりも、私のことが大使館に伝わったかだけが気になる場所なのですが」

「その件か。まあ、2人とも掛けなさい」

杉下とコノリーは、ジャンヌに薦められるまま椅子に腰掛けた。

「まず杉下少佐、あなたの身柄だが、おそらくは明日にはモクスターへ後送されることとなるだろう」

「モクスターですか？」

モクスター州。現実と言うキプロスのことで、この世界ではフェアリーランドの植民地となっている。

「そうだ。ここから一番近い領事館があるのがモクスターなのでね。そのまま現地の日本領事館に身柄を引き取ってもらう予定だ」

「なるほど。まあ、それが一番安全な策でしょうな」

杉下の本音を言えば、観戦武官の任務を全うするために従軍していたロマーニヤ軍まで戻るのが理想だろう。

しかしここは戦場。そしてロマーニヤ軍はフェアリーランド軍の敵軍。連絡がとれないことはないだろうが、この両者間での引渡し

はおそらく無理であろうし、何より戦場での引渡しなど危険極まりない。

杉下としては別に危険を伴う観戦武官である自覚があるので、別に戦場の横断くらいよいであろう。しかし、日本とは中立にあるフェアリーランドとしてはそうはいかない。

フェアリーランド王国が直接の敵としているのはロマーニャとオリュンポスの2国だ。この2国はフェアリーランドが領有する植民地に対して明白な侵略行為を加えているからだ。

それに対して、ドイツはかつて多くの留学生を派遣するなど比較的有效度の高い国である。また日本は、イギリスとの関係こそ嫌悪だが亜細亜に権益を持たないフェアリーランドとは衝突する材料がない。それどころか、両国間には貿易関係すらある。

つまり、この状況から導き出されるのはフェアリーランドとしては日独両国を刺激したくないと言うことである。

となると、杉下の身柄を安全に送ろうと言うのは至極妥当な線だ。

ただし、モクスターに後送された後が大変である。そこからゴーラにしるさらに中立国を経由して帰らなければならないからだ。

しかし、一介の少佐が後送してもらっただけでも破格の待遇を言わなければならない。

「その後送についてだが、準備が出来次第なので明日の夜に飛行場まで移動。そこからモクスターへ空路移動となる予定だ。しかし、少佐のケガの具合だけが心配だね。コノリーは彼の身柄の責任者だ

つたから、確認のために呼んだのだが」

「それで御安心を。軍医の話では、ケガはいずれも軽傷だそうですから」

コノリーに続いて、杉下も如何にも元気ですと言わんばかりに、腕を回しながら言う。

「大尉の言うとおりだよ少佐。この通り、何ともない。長旅でもなんでもこいだよ」

「承知した。では明日の深夜に移動すると言うことでよろしいな？」

「ああ。お任せする」

（深夜か。空襲を恐れて移動の時間を夜にするのは、どこも同じと言うわけか）

そんな感想を彼が抱いたのを知ってか、知らずか。ジャンヌは満足そうに頷いた。

「よろしい。この話はそれだけだ。御苦労でしたな。よければ、後ほど夕食でも一緒にどうか？」

「こちらとしては世話になっている立場なので、断るわけにもいきまい。ありがたく、いただきよ」

「では、後ほど。コノリー大尉、彼に演習の続きを見せてやれ」

「かしこまりました。では少佐」

「ああ。失礼する」

コノリーに案内され、杉下はテントを辞した。

彼がテントから出て行ったのを確認すると、ジャンヌは眼光鋭く呟いた。

「あの男。中々の男のようだな」

2日目 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0069w/>

砂漠の帝国軍人

2012年1月13日17時55分発行